安善寺を守るように立ち並ぶ欅の大木

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘
〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811
◆スタッフ◆
小林国二 小林善秋 高橋潔 加瀬由紀子
室賀清輝 近藤マリ子 近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さまでご覧ください

欅を見て永遠に繋がる「いのち」を思う

翠巌 龍弘

四月中旬芽を吹き、あっという間に新緑、寂しかった境内に潤いを与え、夏には深い緑になり日陰の涼風を提供し、秋には美しい紅葉、風が吹くと舞うが如く散り、十二月下旬頃迄には総ての葉が生命を終える。これが上の写真の安善寺の欅の葉の一生です。だが総ての葉が秋以降迄生命があるわけではなく、春の嵐や台風等で容赦無くちぎり飛ばされたりし短い一生を終る葉も数多くあり、八月のお盆後頃からは弱った葉なのか短期間に燃え尽きたのか、散り始めます。

こんな情景を見ていると人間も同じだなと自然に教えられる思いです。せっかく生まれて来ても事故や病気等、若くしてこの世の別れも有り、永い人生を送っての別れもあり、自分に与えられた寿命が尽きると生命の終わりがあります。

一枚くの葉の一生は終わっても、翌年の春には多くの葉が誕生し「いのち」は受け継がれて行きます。しかし総てのものは無常です。葉の直接の拠所としての枝々もいずれ枯れ、本体である大木自体も生命の終わりがあります。けれども生前中の種から芽生えた新しい生命、また多くの葉の誕生。人間世界も同じです。永遠に繋がる「いのち」です。

平成五年春、本堂大改修工事のため、已むを得ず何本かの欅を伐採した折り、墓地の大欅の一枝が折れ落ちた場合、大変危険ということで枝降しをした時、下から見上げた時には腕の太さに見えた枝、切り降ろされたものはちょっとした木の幹のような太さ、それを三十センチ位の長さで輪切し、大人二人でやっと持ち運べる重さ。その時、次のようなことが頭を過ぎりました。それは、葉一枚くを人間に譬えるならば、風に揺れる葉は私共、小枝が親、太枝・幹が祖父母・祖々父母等の先祖、目には見えない根が遠い先祖と。しっかりした根が幹を支え、幹が太枝、太枝が小枝、小枝が葉を支えるように、私共が生命を謳歌しているのも、永く受け繋がれてきた「いのち」そのものではないのかと。

太陽系は四十五億年前に誕生し、地球の誕生を午前〇時とすると、五時に生命誕生、いのちが受け繋れ、午後十一時五十五分にヒトの祖先が出現したそうです。これらを思うと永遠に繋がる「いのち」の重さ、尊さを思わずにはいせれません。

春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて　すずしかりけり

「教育」の本来の目的

ビハーラの会　田宮　仁

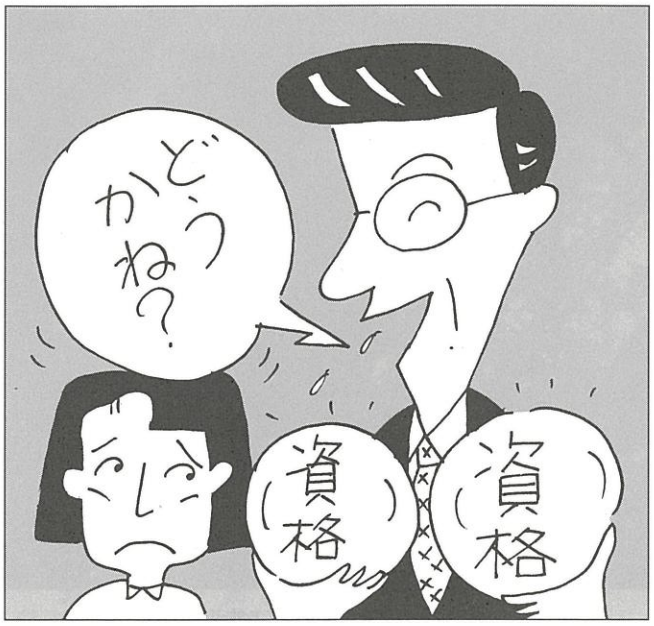
過八月十八・十九の両日、当安善寺近藤龍弘方丈様と共に新潟県立看護大学を会場に開かれた第四回「いのち教育」の研修講座に参加してきました。

教壇に立っている現役の先生方や教員志望の学生、看護学生、医療関係者、宗教関係者、一般の方が約八十名集まり、講義を聴き、「命」「生命」「いのち」などの言葉を使い分けながら皆で話し合いました。

私は講義や参加者のお話を聞きながら、テーマとは別のことを考えていました。

それは、「いのち」の尊さを教えることが今大切だという主催者側の意図とは別に、現在の日本の教育の実情の中では、そのような教育は極めて困難なことではないかということです。

現在の日本の家庭教育、学校教育、社会教育それぞれの何れにおいても、教育ということでの目的が、かつての日本に存在したそれらと違ってきたと考えるからです。



＊＊＊＊＊＊＊＊＊

現在の日本において「教育」を受ける、あるいは親が子供に「教育」を受けさせるということで、何を期待し目的にしているのでしょうか。勿論例外もありますが、多くの場合、高校卒業資格（大学等の受験資格）、大学卒業資格（国家試験等の受験資格）等々の資格取得が目的化しているように思われます。

資格がないと誰も認めてくれない、仕事にもつけないからという、自分自身のためや子供の将来のための、自分にとっての都合や利害ばかりが優先した目的です。一方の学校側も○△の資格が取れるということを学校案内に謳って学生集めに躍起となっています。

ここでいう資格は国家試験合格によって、あるいは△□協会認定というような誰かが発行したり、認定する資格であります。それらの資格は、本来は最低限のレベルを示すものですが、その最低限の資格取得が目的化しています。

たとえば、私は今看護教育の場に携わっていますが、大学側は卒業すると看護師国家試験受験資格が得られることと、過去の卒業生がほぼ百パーセントの割合で国家試験に合格しているという実績を強調して学生募集をします。受験生は面接試験のときには「病める人のお役に立ちたい」等と涙の出るようなイイコト（建前）を答えます。しかし、最終学年になりますと、学生本人も教員も国試合格ということが、何によりも優先する目的となります。確かに国試に合格しないと看護師として働けず、病める人のお役にも立ちません。

しかし、何人かの学生は国試合格が危ぶまれ、所謂「特訓」をいたします。そのような「特訓」の結果合格した場合、学生本人や親御さん、学校側は「幸い」であっても、「患者さん」にとってはどうでしょうか。そのような本来ならば看護師になっては困る人たちが、毎年全国で何人か送り出されているのが実際です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「教育」の目的には、人格の完成、すなわち人間が人間になるということが、特に東洋の、日本の教育の歴史には伝統的に存在しました。だからこそ、自分で学ぶことの面白さも、仕事をすることの意味も味わい知った訳です。また、教育を受けるということのなかには、人様（他人・世間）に迷惑をかけないようになるということも、当然目的の一つとして存在しました。

言い換えますならば、自分のためでもあるが、人様に迷惑をかけないために、ひいては少しでも人様のお役に立つために教育を受け、学ぶという姿勢があったはずです。

誰かによって評価され紙に書かれた「資格取得証明」を頼りにするよりも、学ぶことで見いだした自分自身を頼りとして生きることが、人間としてどれほど大切であり、素敵であるかを教えるのが「教育」と考えます。

仏様の前に座ったときに「それでいいんだよ」と、仏様が微笑んで肯いてくださる世界を知ることが、「教育」の本来の目的であることを取り戻したいと願っています。

合掌

大空（おおぞら）に　心（こころ）の月（つき）を　ながむるも　闇（やみ）に迷（まよ）ひて　色（いろ）にめでり

近隣寺院紹介

堅正寺創建の事

長岡市御山町
堅正寺住職　橋本 英俊

絵・禅道泰巌

堅正寺は、今から約七十年ほど前、昭和十一年に長岡市の市街地を望む悠久山の山頂に建立されました。

昭和九年、二代駒形宇太七氏の発願二より、建設が始まった堂宇は、昭和十年に完成したが、同年七月三十一日に発願者である駒形宇太七氏が逝去されたため、翌年昭和十一年十月四日、開基駒形宇太七氏、挿草新井石禅師、初住橋本禅巌として落慶、入佛法要が営まれたのであります。

この寺の建立について先住である先師は次のように語って織られます。

「この堅正寺建立は、寺号を宇太七氏の厳父の戒名たる樹心院釈堅正に由来して堅正寺とならしたるものではあるけれども、又単に先考菩提の為と云うだけでなく、そこには栄西禅師の興禅護国論、日蓮上人の立正国論を読まされるような、強い護国の熱情と止み難きご護法愛宗の念が燃えていたのであります。

その誠心に動かされて一生をこの仕事に捧げようと覚悟をして外護の方々に諒解を求めたのでありますが、その中で堀内文次郎閣下は、ワザワザ故駒形大人と会見下されて、随分突込んだ話までされ、それならば引き受けてやれと言うので、私も愈々決心致した次第でありますが、お別れする時『駒形さん、あなたの発願されていることは、あなた一人の発願ではありませんよ、先祖からの宿題があなたの全身に集まって、今結晶しようとしているのです。あなた一人の力と思ってはなりませんよ』と申され、三人とも何か大きな力の動きを感じて互いに顔を見合わせて微笑したのであります。

もう一つ私の心を動かした強い力は、お寺完成の暁は、建設の恩人としてでは無く、単なる一求道者として衆庶の中に伍して信證の徹底に努めたいと言う真剣な求道心を抱かれていることでした。御世辞の無い、飾りの無い本當の心からなる真剣な求道心が、唯この一人の為にこの地に留まろうと私に決意させたのであります」。

当時の世相を見ると、今の世相と似ていて、不況で精神的な乱れが見られ、様々な修養道場が各地に設立されつつあったと言うことであるが、なかなか本物が無かった。そのような中で、当時の現代世相に則した活佛教の唱道を目指し、青年の精神修養、思想善導のため、巨額の私財を投じて建立されたのが堅正寺であります。

この建立の志を継承してゆく事が、この寺の責務であり、山門規定の一つに「斎時の鐘点ハ午前十一時二分前トス是開基住生ノ時節ナリ」として、創建の志を忘れないように定めてあります。

安善寺9月～12月までの行事予定

9月	18日(木) 午前11時 [**火防稲荷ロ枳尼尊天大祭**] (稲荷堂)
	20日(土)～26日(金)[**秋期彼岸会**] (20日/彼岸入 23日/お中日 26日/彼岸明 各午前11時 法要・法話)
11月	8日(土) 午後6時半 [**第2回 KAKA笑の会**]
12月	8日(月) 午前11時 [**釋尊成道会**] (お齋あり)
	20日(土) 午前8時半より [**山内大掃除**]

[坐 禅 会]	午前6時～7時	午後2時半～3時半
9月	3日(水)・9日(火)・16日(火)・23日(火)	3日(水)・17日(水)
10月	7日(火)・14日(火)・22日(水)・28日(火)	15日(水)・22日(水)
11月	4日(火)・11日(火)・18日(火)・25日(火)	5日(水)・19日(水)
12月	2日(火)・3日(水)・4日(木)・5日(金)	3日(水)・17日(水)
	7日(日) 夜 午後6時～8時・9日(火) 午後5時半～7時 [断臂接心]	

[写 経 会]	午後1時～2時半		
9月	5日(金)・16日(火)	10月	3日(金)・24日(金)
11月	11日(火)・18日(火)	12月	12日(金) 納経

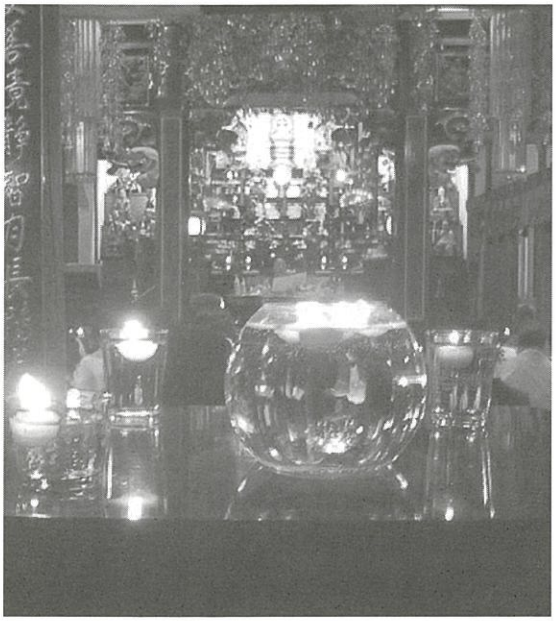
[俳 句 の 会]	午後1時半～3時半						
9月	25日(木)	10月	16日(木)	11月	20日(木)	12月	18日(木) 納会

草の葉に　かどでせる身の　木部山　雲にをかある　心地こそすれ

第一回『ＫＡＫＡ笑の会』無事終了

ありがとうございました

かって、文化の発祥地として多くの方々がお参りや、お寺の行事に参加することを楽しみにしておりましたが、年々お寺の行事に参加される方々が減り「もう一度お寺を見直そう」と方丈さまから提案があり、一人でも多くの方々にお寺に関心を持ち親しんで頂けるような魅力ある会「ＫＡＫＡ笑の会」を最初は五人の女性だけの実行委員で発足いたしました。



七月二十五日、一回目の「ハーブティーとチェロを楽しむ夕べ」を企画し、百枚のチケットを用意しました。果たして完売できるか実行委員一同不安でしたが、問い合わせの電話が殺到し、あっ！　と云う間に完売しお断りする勢いでした。

こうなると当日スムーズに進行できるかが心配になってきました。実行委員も新たに何人か入っていただき、再度打ち合わせを綿密に重ね、当日を迎えました。

雨模様ながら御年輩の方、中年の男性、主婦、高校生、中学生、小学生と幅広い年代の方々、百六十名余の参加者で境内は熱気と期待で盛り上がり、それが私達にも伝り、胸が熱くなる思いでした。

エッセンシャルオイルの香りと灯りの揺らぐ幻想的な中で主催者近藤住職、代表加瀬由紀子より「ＫＡＫＡ笑の会」についての挨拶で始まり、長岡市内でハーブコーディネーターとして活躍されている長沢喜美さんのハーブやアロマテラピーの効能について講演して頂き、実際に美味しいハーブクッキーとハーブティを皆様より味わって頂きました。

第二部は、県内で定期的に演奏会を開いておられる片野大輔さんのチェロ、斉藤竜夫さんのピアノで「大きな古時計」「川の流れのように」等の演奏で、うっとりと夏の夜の一時を楽しんで頂き、盛大な拍手で終わることが出来ました。

参加された方々から「素晴らしい企画を有り難う、また声をかけて下さい」と励ましと感謝の声を頂き、今までの疲れも忘れ涙の出る思いでした。

その後「ＫＡＫＡ笑の会」に興味を持った大勢の方々から会員になっていただき、お蔭様で実行委員も十名に増えました。

この度実行委員として携わらせて頂き、何度かお寺に足を運ぶうちに思っていたより、お寺って堅苦しくなく色々な方達と知り合いになれて良かったなあと云うのが実感でした。

次回は十一月八日（土）「全国叙情歌を歌う会」を県内二十ヶ所でご指導されておられる、新潟在住のボイストレーナー・バリトン歌手、鏑木健（かぶらぎけん）先生をお迎えして、楽しい夕べを開きます。

皆さん！　こぞって参加し大きな声で笑って歌ってみませんか！　きっとストレス解消になります。

（実行委員　五十嵐・安藤）

読者からの便り

至福のひと時をありがとう

長岡市●太刀川善之助

芳しい香りと、数十個のグラスに揺らめくローソクの灯が幻想的な雰囲気を演出。「ハーブティと香りでリラックス」が始まるも、ハーブとは、丘陵公園で色々な種類をサラダ感覚で食べたのが初めての出会いでした。

長沢講師の解説が始まると、ハーブティとクッキーが配られ、賞味しながらアロマには薬理作用があると聞く。植物から抽出されたエッセンシャルオイルの香りは心を和ませ、浴用では体もリラックスできるという。隣の家内が「講師の肌はとってもきれいね」との言葉は、精油の効果を証明し、説得力があった。

香りに包まれて、顔や手足、更には体をマッサージされたら、王侯貴族の奥方のムードが味わえて、男はそれに惑うのだろうなァ!?

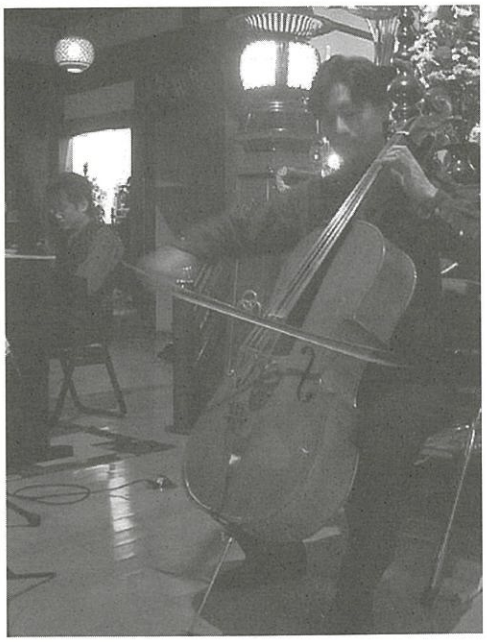
第二部は「いやしのチェロコンサート」。高校時代から特にクラシック音楽に親しんできただけに嬉しい。

近年は、演奏会場のみならず、ホテルのホール、美術館、豪農の館とか歴史的建造物でさえ演奏会が開催されるようになったが、寺院の本堂で聴くチェロは初めてで、演奏、音響とともに興味を持って参加した。

生憎の雨と蒸し暑さのため、片野さんも演奏しにく

いだろうなァと思いながら聴く。チェロの代表曲「白鳥」に始まって、特に音楽ファンでない人にも馴染める曲も選ばれ、バッハの無伴奏を入れて、演奏家としてのバランスを取る気配りは、至福のひと時を与えてくださった。

堅い佛教の法話も良いが、こんな催しも、吾々とお寺とを結ぶいい機会になるのではないか。企画の加瀬由紀子さんありがとう!!



もう一度、妻と聴く

長岡市●大勢待宗一

艶やかな音色と定評のチェロ奏者ピアティゴルスキーの演奏を、T市の公会堂で、彼女と聴いたのは昭和三十一年でした。

まだ男女交際はお忍びの時代で、アンコール曲の「白鳥」に、彼女との同伴効果も加わって「人生はバラ色だァ」と舞い上がる思いだった。その彼女と結婚してから二十九年の歳月が経て、妻は不運にも病に倒れて亡くなった。今年の十三回忌は、方丈様にお経を上げていただいて、幼い孫達も加わっての供養でした。

もう十年以上も前になるでしょうか、娘が北海道旅行に旅立ちの朝、「お母さんも連れていくよ」と、分骨と写真を持って出かけました。その娘の行為に、供養の仕方も色々とあるのを知って、皇居一周の散歩、立山登山にと、胸に下げて歩きました。

七月のチェロのコンサートは、本堂のローソクの炎を揺るがすように響くピアノとチェロの演奏を、ご先祖様方とご一緒に、妻の分骨と写真を抱いて聴かせていただきました。

四十七年前、T市で青春の血を沸かせて聴いた「白鳥」を、妻の十三回忌の年に分骨を抱いて安善寺で聴いたことに「縁」を感じて、素晴らしい供養をさせていただいたと、胸を熱くしました。企画された呵呵笑の会幹事の皆様、ありがとうございました。会の発展をお祈りします。

●

人の痛さを知らなければ

新座市●北野　芳子

「我が身をつねって、人の痛さを知れ」という諺があります。人間という者は、他人のことには無関心だが、自分で自分をつねってその痛さを知れば、人の痛さ、苦しさを思いやるようになる、人の苦しみに思いやりを持ちなさいということです。

近頃あまりにも恐ろしい事件が多く、なぜこうなってしまったのか考えなくてはならない深刻な時代になってしまいました。

戦前に生まれた者は、善悪の判断など、人とのつきあい、社会とのつき合いをしっかり教えられました。戦後、親となり、自由主義の名の下に子供達を叱ることなく自由に育て、また、その子供は親からも、学校からも、社会からも叱られることなく大人になり、それが現在の子供達へと続いているのでしょうか。「自分がやりたいからやる」という気持ちなのでしょうか。考えてしまいます。

自分がされて嫌なことは、他人にもしない。ただこれだけのことなのです。

先人の生活の智恵から伝えられてきたこの諺を、もう一度かみしめてみたいと思います。

仏の縁が人の縁

長岡市●水沢　康子

待って、待った子供は首にじゅうずを巻き、全身むらさきでこの世に来ましたが、泣き声もあげず、元来た道を帰っていきました。二月の寒い日で、送ってもあげられず、毎日泣きの涙で、それでもオッパイが張って…。助産婦だった母に「仏になっても、その乳をかけてやれ」と言われ、本当に悲しかった。

子供を抱いて、喜んで三人の生活を待っていたのに、小さな黒い仏壇を抱いて帰ってきました。

毎月命日になると、先代の住職様が二階貸りの狭い部屋でお経を上げてくだされ、「この仏を大事にしなさい。いいことがある」と言われ、そう言われた通り、その年の四月、新しく出来た団地に入居することができました。

その後、二人の子供に恵まれ、この世の中で一番嬉しいことは、生命の誕生だと実感し、この子供を大事に育てるのが私の仕事だと思いながら、二人の子供を保育園にあずけ一生懸命働きました。この街道でいろいろな人達との出会いがあり、私達にとってこの街道は「情道」。今、私は仏に試されている。これが出来なければ次の道は開けない。「おっかあが僕達を見ているから悪いことが出来ない」と、息子が悪い子供にならないと思ったのもこの道…。

今日一日、無事に過ごせればいい、明日になれば、また今日と思いつつ、二人で働いたおかげで、堀金に土地を求め、家も新築することができた。

お墓参りに行くと、息子だけはタバコをローソク代わりに手を合わせる。「この仏を大事にしなさい」と言われたご住職様の教えを、これからもずっと守りたい。

息子一家と同居しますが、新築した十八年前と同じIBホームの小林善秋さんにお願いする事にしました。母がその昔、小林さんの家にお産のお手伝いに行き、それ以来のおつき合いをさせていただいています。同じく、母の使いで寄せてもらっていた加瀬マサ子さんも、同じ安善寺の檀家。仏の縁で、人の縁があるんですね。

我が家に伝わる 精霊棚の飾り方

神奈川県葉山町　矢島 敬美

何時も借り物文化で騒いでいて、この世の中はどうなってしまうのかと心配していたものの、八月も半ばともなれば世間では又、お盆お盆と賑わって民族が大移動。この時期ばかりは日本人らしく、皆が仏教徒に戻ったようで、一時の気休めだが、気分は落ち着きます。

お盆は先祖への感謝、思いやり、慈しみ、おもてなしなど、優しさの原点「美しい人間の心」の行事ではないかと感じています。

多々ある年中行事で、何故かお盆は月遅れや旧暦が主流。私の居住する葉山、ここ三浦地区もまた然り。しかし我が家は先代より新暦なので、七月に既に済みましたが、世相と共にひと月も気分はお盆でした。

先祖霊皆々様を迎えてご供養、また無事に極楽浄土へのお戻りをお祈りする。日常の祈りにも増して、両親始め先祖代々皆々様に思いを深く馳せる良い機会ともなって、出来る限りのおもてなしをと思う気持ち、ご先代より毎年欠かさず、こんな遠い所までお棚経に来てくださる安善寺方丈様、お参りに訪れる縁者皆にも誠意ある準備をしていと考えると、精霊棚を飾るにも勢い力が入ります。

精霊棚はその昔、屋外に飾ったものを座敷内に飾るようになっても、ご仏壇とは別にするもののよう。地域ごとにも様々で、時を経て更に自由度を増してゆく昨今ですが、既に我が家では、ご仏壇と合体させた形で例年お飾りしています。いずれにしろ、美しい風習を続けてゆく事が大切と考えます。

精霊棚作りは幼少の頃より父母に教えられ、良く手伝わされてきたものでした。

十三日は朝から棚作り、夕方には身だしなみも整えて迎え火と、結構忙しい。そのため十二日に下準備、ご仏壇掃除、お位牌の塵払い、金属類のお磨き、お盆用品の買い物等を済ませます。

棚飾りをするイメージは、「やぶのように飾る」と教わりましたが、何故なのか意味は分かりません。元来は屋外だったからなのか来世を意味する「草葉の陰」などの言葉とも何か繋がるのかなどとも考えます。

写真が見えにくいかと思いますが、基本的な構成は、壁に組み込まれたご仏壇があり、期間中はその内部の配置を換えてお位牌段とします。上段ご本尊様はそのままに、下段の通常の物を片付け、中段の位牌段から下段手前に目立つようにお位牌を移動し、マコモを敷いて安置します。先端の引出式の棚板部分は、日替わりのお供物のスペースとしてお膳、十四日の迎え素麺、十五日の送り団子等々、日々の変化性を持たせます。

仏壇の前方に作る精霊棚は、盆ゴザを敷き詰めた大きめの二段の棚と焼香用に経机を置き、広げた部分の結界を区画し、なお飾物取付用にもする細柱を左右に立てます。この細柱の中間に左右に渡して手製の間垣（最近売ってない）をしっかり止めて、左右に笹等を立てて（ススキの束等も可）吊し、糸を付けたホオズキ・枝豆・いんげん・蒲の穂などを下げて豊穣感を作ります。

二段の棚の上段は、季節の野菜・果物・菓子・素麺束など専らお盆物・供物に、下段はマコモ敷きして、中央には全ての精霊に食を施しお供する、お盆の目的行事百味飯食のための「ミズノコ」（キュウリやナスを賽の目に切り、洗米を混ぜ、ハス或いは里芋の葉に盛り、別の器には水を張り、みそ萩の花穂を束ねた箒で供物に注ぐ）と「過去帳」を置き増す。

馬に乗り、牛に荷物を背負わせて道中されるオガラの足で作るキュウリの馬とナスの牛を配置したら、盆提灯、行灯等を飾り、ふんだんな仏花を飾ればおおよそ完成です。

尚、この基本構成素材は、毎年行うことなので、直ちに組立て、また取外しが簡単に出来るような部材が作ってあります。

駟（よつうま）の馬　四（よつ）の車（くるま）に　乗（の）らぬ人（ひと）　真（まこと）の道（みち）を　いかでしらまし

旬歌 愁灯

[その二] ガムラン（インドネシア音楽）

加瀬由紀子

「キナーレへ来なーれ」なんぞと、十日町の友人から誘いがあった。キナーレという複合交流施設を市が新設し、その一隅に出店したから見学せよ、という趣旨の呼びかけにすぐ賛同する参加者六名（デンマーク人を含む）を載せて十日町へ向かった。おりしも「越後妻有アートトリエンナーレ・大地の芸術祭」開催中でそちらも見ようと欲張る。

十日町は芸術祭のせいか、長岡の大手通よりも悲しい？　ことににぎわっていた。キナーレの中にも数点展示作品があって、友人のリサイクル着物の店を見たり、機織体験などをしているうちに次の作品展示場に行く時間がなくなってしまった。

となると行く所は一箇所しかない。三年前の第一回の作品、ジェームス・タレルの「光の館」である。全員が気に入って数回訪ねているその展示は、コナラやトチノキの林に囲まれた静かな川西町の山の中腹に位置する。見下ろす信濃川を中心に広がる十日町の家並みの彼方には県境に連なる山々がかすみ、やがて空に溶け込んでゆく。雪国の高床式でもあり、正倉院の校倉風ともとれるどっしりとした建物は、部屋の天上の真ん中が動き、額縁状の空間に空が見えるのが特徴だ。私たちは仰向けになり、刻々と変わる空の色を、季節を、風を味わった。「ウーン、ここはアジアだ」デンマーク人が言う。なぜ三年前の作品をこの時期に見に行くのか、深く考えるのはこの際よしておこう…。

私は八月の最終日曜に再び会場を訪ねた。松之山ステージを見に行くのが目的だ。棚田は降りしきる雨に震えているようにみえた。冷夏のせいか稲の実入りが遅い。作品「森の学校キョロロ」は里山、棚田、現代アートがどのように融合するのか、興味深かったのだが、作品を盛り立てているのはなんと野菜売りのおばちゃんであり、棚田で作業する老人である。そして何より松之山の自然だ。

四月に所用で上京し、いつも利用する神田のビジネスホテルに宿泊したときのことである。破格値のため部屋にバスがないのだが、地下には女性用サウナと大浴場があり、サウナ好きの私にはありがたい。こういう安くても快適なヤドを知っているのはアジア系の旅行者が多い。湯船で知り合った若い旅人もインドネシアだと私に告げた。「私の高校の後輩に皆川厚一さんという有名なガムランの研究者がいる」と話すと彼女は目を輝かせ、「小さいときからダンスを習って来た」とたちまち打ち解ける。レゴンダンスの時の目なのだとカッと見開いて瞬きせず目を動かし指をくねらせる。染色の勉強に来たという彼女から、行かずとも心の中でガムランが聞ける展覧会がある、と教えてもらう。

翌日、私はその展覧会場、東京駅のギャラリーでバリ、ウブドの画家ブディアナの絵を鑑賞した。「神聖」と「邪悪」、「混沌」と「静謐」、「官能」「宇宙」「悪趣味」「スピリチュアル」が眩暈のように駆け巡り、ガムランの響きやケチャックダンスの「チャッチャッ」という声が確かに聞こえてくる。

仏教はインドからカンボジア、ジャワへと、日本への伝来と別の道も辿った。ヒンドゥ教と混淆しながらも、ボロブドール寺院などの仏教遺跡も多数残っている。独特の踊りや踊る前に花びらをまくしきたりも、隔たったクメール文化にその祖型を見ることができる。棚田に降る雨は、ガムランのゴングやボナンパルンという打楽器の音を彷彿とさせる。松之山もインドネシアも棚田で米を作ってきた。同じ農耕民族だ。「ウーン、ここはアジアだ！」

トランス（夢遊状態）となり恍惚とする踊り子を煽り、頂点に達したガムランのように雨はさらに激しくなって来た。

お別れ

（平成十五年七月～八月末まで）

石崎治男様　七月六日寂
長岡市石内

●

太刀川秀夫様七月三十日寂
長岡市下山

●

鈴木トシ様　八月三日寂
長岡市石内

●

坂詰節子様　八月七日寂
群馬県伊勢崎市

●

日山清吉様　八月廿六日寂
長岡市新保

御冥福をお祈り申し上げます。

ペコ大蔵日記
パートⅡ

たまねぎ事件

ペコのひとりごと

梅雨が明けたのか明けなかったのか、本当に雨ばかりで、私も去年のような焼け付くような夏は苦手ですが、こう雨ばかりでは外にも出られずストレスがたまってしまいそうでした。

そんな中、お盆の十三日のそれもこれから一番忙しくなる時間、お寺に入る道路も駐車場も大渋滞のさ中、誰の声かははっきりと覚えていないのですが「お母さん、さくらが大変！　たまねぎを食べてしまった！」と言う声が聞こえてきました。

月極駐車場のお墓参りの人が車を止めてしまったとかで、お母さんは外に出て応対におおわらわの最中、何とか他の場所に止めてもらい許していただき、家に駆け込んできたお母さんの目に飛び込んで来た物は、たくさんの精進揚げの中から玉葱のかき揚げだけが無くなったお皿でした。（お寺のお盆は毎年、ソーメンと精進揚げをして、霊供膳に盛り本堂やお仏壇の仏さまにお供えするのです）幸いお盆のお経が始まる直前で、仏さまの分はお供えしてあったので、ほっとしました。

さくらはお母さんの姿を見たとたん自分のした事が解かったのか、すごすごとケージに入っていってしまいましたが、それから獣医さんに電話をかけるやら…結局、動物病院に連れて行くことになりました。

私の手も借りたいような日に、さくらは本当に世話がやけてしまいます。病院ではせっかく先生がお薬を用意して下さっていたのに、口を噤んだまま薬を拒否したとかで、活性炭を沢山いただいてきて事なきを得たようです。

翌日も元気が良かったので皆一安心、猫はそんな事はないのですが、犬は玉葱を食べると命を落とすこともあるとか、本当にびっくりしました。

お盆の十三日のこと、お帰りになっていたご先祖さまが守ってくださったのですね。

ニャーン

編集雑感

九月に入り秋の彼岸がやってきます。日本では彼岸の中日を秋分の日の祝日として祝いますが、その主旨は国民の祝日に関する法律で「祖先をうやまい、なくなった人をしのぶ」となっています。

春秋のお彼岸に合わせて春分の日、秋分の日がありますが、中日はそれぞれ昼と夜の時間がほぼ同じ日＝太陽が真東から昇り真西に沈む日ということで、極楽浄土が西にあるとされていることから、日の沈む太陽が極楽浄土への道しるべとの信仰が生まれ仏教行事になっていったようです。

仏教行事のことを偉そうに書くとボロが出そうですので花より団子の話。春咲く牡丹の花から「ぼた餅」、秋咲く萩の花から「おはぎ」をお供えすると言う話もナルホドと納得です。

この季刊紙も多くの皆様から支えられ投稿を戴き継続しておりますが、一番大切にしたいことは、お檀家の皆様どうしの交流の場としてこの季刊紙が活かされてほしいということです。

その為に読者の皆様には原稿用紙を同封させて戴いております。今回も四名の方から投稿を戴きました。文章が下手だとか、内容がつまらないんじゃないかとか全く気にせずお気軽に投稿してください。

ちなみに、次回「新年号」では、皆様からの『雪』にまつわる思い出やエピソードを特集したいと考えております。あの大雪だった年の事、心に残る雪景色などを思い出しながら原稿用紙に向かってみてください。

編集委員も下手ながら（例外の方もおられますが）四苦八苦しながらの文章です。気にしない、気にしないです。

（高橋　潔）

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。
ハガキまたはお手紙、ファックスなどで、お気軽にお便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問（編集部や住職がお答えします）など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、悲しかったこと、怒ったこと。

第二十四号、新年は平成十六年一月一日(木)発刊予定です。

濁りなき　心の水に　すむ月は　波もくだけて　光とぞなる